

委託事業実施内容報告書

平成27年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(B)】

実施内容報告書

受託団体名 特定非営利活動法人 教育活動総合サポートセンター

1. 事業名称

・ともに学ぶ日本語学習支援事業

2. 事業の目的

・外国につながる子どもたちや外国人市民が「自分の体験や気持ちを日本語で書いて表現する」力を獲得したり、生活するのに必要な情報を「やさしい日本語」にしたりするプロセスを通じ、外国人市民とともに日本人市民もお互いに学びあう。またこれらの対話活動の学習を通じ、市民同士の信頼関係を築き、同じ地域に住む市民や行政関係者が理解を深めて、多文化共生のまちづくりに寄与する。本事業を通じ、バイリンガル外国人市民サポーターが日本語学習者をサポートできるよう日本語のレベルアップを図る。

3. 事業内容の概要

①外国につながる子どもたちや外国人市民が『自分のことを語れる・伝える』場が、地域には少ないので、対話を通して自分のことを語り『自分の経験や思い、あるいは主張を日本語で書いて表現する』講座を行う。また、共生のまちづくりの担い手となる地域住民も、サポーターとして外国人市民と対話ができることをめざした人材育成の講座も実施する。その上で外国につながる子どもたちや外国人市民などが、デジタルストーリーテリング(DST)の手法により、日本での生活上の課題について映像作品を作成する。制作した映像作品を上映し、外国につながる子どもたちや外国人市民が抱える課題を知るため、地域住民や行政機関などの職員とともに対話会を行う。

②外国人市民およびその子どもたちが、日本で生活するために必要な情報やその背景にある文化を学び、子育て関係や学校の通知文等を日本語サポーターとともに『やさしい日本語』に言い換える過程を通して日本語を学ぶ。学習の成果は文書を編集。発行している部署に提供して、外国人市民を始め一般市民にも広くいきわたるようにする。

4. 事業の実施体制について

・日本語教育の専門家として、NPO法人日本語・教科学習支援ネット所属の講師や指導者、横浜国立大学の講師による人材育成講座・日本語教育を行い、日本語教育の連携協力体制をとる。幸市民館の日本語学級やにほんごワールド、幸国際子育てクラブトントンなどで、研修の一環としてDST上映会や事業の報告会を行う。そうすることで、ボランティアは外国人の思いに共感したり背景を知ったり、やさしい日本語で話すことや相手に合わせて話す・伝えることを学び、その後の活動に活かせる。地域日本語教育推進協議会や川崎市外国人教育推進連絡協議会で、取組について広報や事業の報告する。DST上映会は幸区多文化共生推進事業実行委員会との連携で多文化共生講座として実施する。やさしい日本語事業では幸区役所保健福祉センターの保健師や学校の養護教諭などとともに講座を行い、やさしい日本語にするポイントやプロセスも伝える。DST研究所との連携で、DSTによる日本語教育としてのプロセスをマニュアル化する。多文化共生のための人材育成講座や日本語指導における日本語サポーターについては、一般市民だけでなく、区役所や教育委員会などと連携し、研修の一環として職員からも参加者を募るよう努力する。

5. 運営委員会の開催について

【運営委員】

1	樋口 万喜子	NPO中学・高校生の日本語支援を考える会
2	須摩 修一	DST研究所
3	池田 恵子	幸区多文化共生推進実行委員会
4	榎原 真也	川崎市総合教育センター
5	高畠 正晶	川崎市地域日本語教育推進協議会
6	石渡 伸幸	川崎市幸区役所
7	佐藤 忠	川崎市幸区生涯学習支援課(幸市民館)
8	齋藤 元	NPO教育活動総合サポートセンター

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成27年6月19日(金) 13:30～15:30	2時間	幸市民館	樋口万喜子、須磨修一、池田恵子、島田道雄(榎原真也代理)、石渡伸幸、佐藤忠、齋藤元	『ともに学ぶ日本語支援事業』計画について(1)取組1:多くの外国ルーツの方の声を広く発信するため昨年の作品の上映会等を関係機関等で実施する。制作者や地域の方との関係を構築する中で居場所となるような活動を行う。(2)取組2:やさしい日本語にすることで、情報が伝わりやすくなる上、翻訳能力が高くなくても多言語翻訳のハードルが下がるだろう。学校の文書については、総合教育センターなどのHPにアップを検討を行う。行政職員や教員研修の一環として、検討する。校長会への働きかけなども検討する。
2	平成27年11月10日(火) 13:00～15:00	2時間	幸市民館	樋口万喜子、須磨修一、島田道雄(榎原真也代理)、池田恵子、佐藤忠、齋藤元	1. 事業報告・目標達成状況・成果・改善点・今後の展望について(1)取組1A・B:地域・行政・教育関係への発信を行う。地域・行政・教育関係との連携を検討する。取組2:本事業は多文化共生のまちづくりの一助になるか。異質なものを受け入れられる地域づくりのきっかけになるのではないかと。2. 他機関との連携について:多文化共生のまちづくりの一助になるのかを検討する。異質なものを受け入れられる地域づくりのきっかけになるのではないかと。
3	平成28年3月1日(火) 13:00～15:00	2時間	幸市民館	樋口万喜子、須磨修一、高畠正晶、島田道雄(榎原真也代理)、池田恵子、佐藤忠、齋藤元	1. 取組1Cの報告と目標達成状況:思いを伝えたい日本語学習者を発掘し、その人たちとつながりながら活動に広がりを持たせることが必要だろう。自分の声に耳を傾けてくれる人がいることで、日本語学習のモチベーションが上がり、次のステップにつながるのではないかと。2. 本事業における日本語学習の成果と報告内容の検討:子どもから高齢者まで「生活者としての外国人」の包括的な活動にしていく必要があるだろう。連携も必要だが、コーディネートも必要。

6. 取組についての報告

取組1：自分のことを語り伝える場づくり事業～デジタル・ストーリーテリング(DST)作品による外国人市民の声を発信する

(1) 体制整備に向けた取組の目標

・外国につながる子どもたちや外国人市民等が自分の経験や思いや考えを日本語で言語化する。日本語パートナーが対話をしながら”私”のことを語るための支援をし、自分物語を書く。自分の声で録音し、写真やDST作品として発信するプロセスを通して自尊感情を高めるとともに日本語のレベルアップを図る。DST作品の上映会・対話会で、話し合いを通して住民同士がつながり、横の関係を作る。言語的マイノリティが抱えている課題を地域住民や行政職員等が知る。

(2) 取組内容

A:『もっともっと伝えよう！自分の気持ち』自分物語づくりにつなげられるような、地域日本語教育における書く指導を考える。
B:『多文化共生のために私たちにできること&日本語パートナーのDST制作ワークショップ』自分物語のDSTを制作するプロセスを通して、多文化共生社会と「私」について考える。DSTのテーマ：私に影響を与えた人、出来事との出会い
C:『伝えよう、私のこと』外国につながる子どもたちや外国人市民等がテーマを決めて、経験や思い・考えを語る。その経験や思い・考えを日本語で作文し、自分の声で録音し、自分物語の映像を作成する。地域住民や関係行政職員等に広く呼びかけ、DST作品の上映会・対話会を開催する。そのワークショップを通し、言語的マイノリティの課題を知り、共生について一緒に考える。

(3) 対象者

・川崎市南部に居住する外国につながる子どもたちや外国人市民、および地域の日本人市民、行政関係機関の職員

(4) 参加者の総数 115 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 21 人

【出身・国籍別内訳】

中国	16人	インドネシア	人	
韓国	6人	タイ	人	・ボリビア1人
ブラジル	人	ペルー	5人	・アメリカ1人
ベトナム	1人	フィリピン	2人	・フランス1人
ネパール	人	日本	81人	・中国帰国者1人

(5) 開催時間数(回数) 75 時間 (全 25 回)

(6) 活動の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1 A1	平成27年6月22日 (月) 10:00～13:00	3	幸市民館	13人	自己紹介しよう わたしの好きなことを話そう 書くテーマを考えよう	初対面のあいさつをする。 自己紹介(全体→ペア)をする。 マインドマップの説明をする。 「私の好きな○○」について、ペアで話し、相手のマインドマップを書く。マインドマップからテーマを選ぶ。 選んだ3つについて簡単なメモを書く。 ふりかえりをする。	長嶺倫子	西山陽子 加藤真帆子
2 A2	平成27年6月29日 (月) 10:00～13:00	3	幸市民館	15人	話して書こう	前回抽出したテーマについて話しながら、内容を深める。 書くことを体験し、達成感を得、次回につなげる。 ふりかえりをする。	長嶺倫子	西山陽子 加藤真帆子
3 A3	平成27年7月6日 (月) 10:00～13:00	3	幸市民館	14人	書き手の理解を深めよう 書くことの達成感を得よう	前回の作文の読みあいをする。 コメントを踏まえ、清書する。 ふりかえりをする。	長嶺倫子	西山陽子 加藤真帆子
4 A4	平成27年7月22日 (水) 10:00～13:00	3	幸市民館	13人	読みあいむけてコメントを書こう	作文の読みあいとコメントを書く。 他グループの作文を読む。 ふりかえりをする。	長嶺倫子	西山陽子 加藤真帆子

5 A5	平成27年7月29日 (水) 10:00～13:00	3	幸市民館	16人	文集を作ろう みんなで読み合わせをしよう	ファイルメーカーを使って文集を制作する。 作文の読み合わせをする。	長嶺倫子	西山陽子 加藤真帆子
6 B1	平成27年7月12日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	11人	多文化共生のために私 たちができること	多文化共生とは・アイヌレプルス・大田 区多文化共生実態調査報告から・DST 視聴・多文化共生のために私たちがで きることワークショップ	樋口万喜 子	なし
7 B2	平成27年7月19日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	6人	活動に対する認識の共 有	テーマについて話し合う	小澤真人 片桐文雄	須摩修一 池田恵子
8 B3	平成27年8月2日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	8人	ストーリーサークル 台本の構成	ストーリーサークルで語りあう。 マインドマップの説明と実践。 初め・中・終わりで、構成を考える。	小澤真人 片桐文雄	須摩修一 池田恵子
9 B4	平成27年8月23日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	7人	台本の仕上げ 録音	作文の読み合わせ・推敲をする。 録音をする。	小澤真人 片桐文雄	須摩修一 池田恵子
10 B5	平成27年8月30日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	6人	映像編集	PCで映像編集をする。	小澤真人 片桐文雄	須摩修一 池田恵子
11 B6	平成27年9月20日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	6人	制作者同士の上映会	作品の上映をし、感想等を言い合う。 対話をする。	小澤真人 片桐文雄	須摩修一 池田恵子
12 C1	平成27年5月17日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	23人	上映会	昨年の作品の上映をする。対話会をす る。参加者同士の関係作りと交流。	片桐文雄	須摩修一
13 C2	平成27年5月24日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	14人	上映会	昨年の作品の上映をする。対話会をす る。参加者同士の関係作りと交流。	片桐文雄	須摩修一
14 C3	平成27年10月4日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	11人	上映会	昨年の作品の上映をする。対話会をす る。参加者同士の関係作りと交流。	小澤真人	須摩修一
15 C4	平成27年11月1日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	7人	対話して関係づくり	自己紹介をする(全体→ペア事前アン ケートに記入する。 ふりかえりをする。	樋口万喜 子 小澤 真人 片桐文雄	加藤真帆子 須摩修一
16 C5	平成27年11月8日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	8人	ストーリーサークル	『自分の体験』か『自分に影響を与えた 人や出来事とのであい』のテーマでス トーリーサークルで語りあう。 ふりかえりをする。	樋口万喜 子 小澤 真人 片桐文雄	池田恵子 須摩修一
17 C6	平成27年11月15日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	7人	マインドマップ	自分の思いをマインドマップでブレン スティングする。	古屋恵子 小澤真人 片桐文雄	池田恵子 須摩修一
18 C7	平成27年11月23日 (月) 13:30～16:30	3	幸市民館	8人	対話型作文活動	日本語パートナーと対話しながら書くこ とを決め、ポストイットに書く。 書いたことを全員で共有する。	樋口万喜 子 小澤 真人 片桐文雄	加藤真帆子 須摩修一
19 C8	平成27年11月29日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	9人	対話型作文活動 文章の構成	日本語パートナーと対話しながら構成 を考え、作文を書く。 書いたことを全員で共有する。	樋口万喜 子 小澤 真人 片桐文雄	池田恵子 須摩修一
20 C9	平成27年12月6日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	9人	対話型作文 推敲	日本語パートナーと対話しながら文の 入れ替えや日本語での表現方法を考 える。	樋口万喜 子 片 桐文雄	池田恵子 須摩修一
21 C 10	平成27年12月13日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	9人	音読練習・録音	自分の書いた作文を音読練習する。 録音をする。	樋口万喜 子 小澤 真人 片桐文雄	池田恵子 須摩修一
22 C 11	平成28年1月24日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	10人	映像編集	PCでイメージの写真や画像を探し、編 集する。	樋口万喜 子 小澤 真人 片桐文雄	池田恵子 須摩修一

23 C 12	平成28年1月31日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	10人	制作者同士の試写会	取組関係者の前で自己紹介する。作品の紹介をする。 他の人の作品を見て、感想を言う。	古屋恵子 小澤真人 片桐文雄	加藤真帆子 須摩修一
24 C 13	平成28年2月11日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	81人	上映会 対話会	観客の前で自己紹介をする。作品の紹介をする。 対話会では観客の質問に答えたり、観客のやりとりを聞いて感想を言う。	樋口万喜子 小澤真人 片桐文雄	加藤真帆子 須摩修一
25 C 14	平成28年2月14日 (日) 13:30～16:30	3	幸市民館	8人	ふりかえり	日本語で自分のことを表現できたかや日本語の習得についてふりかえる。関係性の変化、今後の社会参加への希望を考える。	樋口万喜子 小澤真人 片桐文雄	加藤真帆子 須摩修一

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【A第2回 平成27年6月22日】

1. あいさつをする。今日の活動内容を伝える。
2. 自己紹介をする。(全体→ペアでもっと詳しく)
3. 「私の好きな〇〇」についてマインドマップのやり方を説明をする。
4. 「私の好きな〇〇」について、ペアではなす。相手のイメージマップを書く。
5. イメージマップから今後3回のテーマを選ぶ。
6. 選んだ3つについて簡単なメモを書く。
7. 本日の振り返りをする。
8. 今日の資料をファイルにまとめる。
9. 活動の中で気づいたことや気になったことを共有する。(サポーターのみ)



活動例②

【C:第13回 28年2月11日】

1. 全体会:趣旨説明をする。
2. 制作者が自己紹介をする。
3. テーマごとの分科会に分かれ、上映会を行う。
A* 家族への愛
* 戦争から日本へ
B* 子育てと教育
* 出会いの大切さ
4. グループ毎に制作者と対話会を行う。
5. まとめ アンケート記入する。



(8) 目標の達成状況・成果

Aの書く活動の中で、初級と中級と分け、各グループに日本語教育専門家がモニターしたことで、サポーターが安心して日本語学習者とペア活動ができ、活動全体が活性化した。さらに、サポート自身も作文を宿題として取り組み、グループや全体で共有したことで、お互いに学びあうという雰囲気ができ、お互いの関係が深まったと思われる。その活動をDST活動にも応用し、サポーターはお互いに学びあう立場である、という認識の中で作業を進められ、関係を深めることができた。関係を深めることが、DSTの質の向上、日本語を学ぶことへの安心感から意欲向上という結果を生んだのではないかと思われる。

A:『もっともっと伝えよう!私の気持ち』では、「書く」活動を通し、母語話者、非母語話者問わず、自分のことを他者に伝え、お互いの理解を育む様子が見られた。対話型活動は、学習者、サポーターという役割を固定することなく、ひとりの人間としての意識が生じる活動となった。また対話を通し、ひとつのものを作り上げることで参加意欲、連帯感、責任感が高まった。様々な背景の人がいることで、話し合いが活性化され、サポーター自身も作品共有過程で、自らへの気づきを得る機会となり、エンパワメントされている様子も見られた。今後の地域日本語教室において実施する双方が学び手となる活動の一例になったのではないかと思われる。

B:『多文化共生のために私たちにできること』では、サポーターがDST制作を自ら体験することで、学習者の制作プロセスを実感することができた。特に「対話」「構成」における支援のあり方を考える機会となった。構成におけるマインドマップの使用法、構成表の使い方などで工夫が見られ、より効果的な支援が可能となった。また自らの作品制作は支援者の自己理解を深める機会となり、支援活動へのモチベーションが向上する事例が見られた。

C:『伝えよう、私のこと』で、今回作成されたDST作品は、以下の通りである。「私のお父さん」(Oさん ペルー)「私の幸せ」(Uさん フィリピン)「日本に来てからの私」(Rさん 中国)「大切な仲間」(Tさん 中国)「波乱万丈 私の人生」(Sさん 日本/中国)「苦難を乗り越えて」(Tさん ベトナム)「一期一会」(Rさん 中国)「着物道」(Kさん 中国)「ひよこ」(Kさん 韓国)「自然教室」(R児 中国)等である。アンケート、インタビュー、観察による検証方法により、これらの作品の制作過程における学習者の姿や内面の思いをつぶさに検証してみると、当初設定した三つの目標の達成に大きく近づくことができたと考ええる。DST作品は主に「グループ対話」→「マインドマップ作り」→「作文作り」→「音読練習・録音」→「映像作品の編集」→「上映会」の過程で進められたが、取り組みの成果として次のようなことが挙げられる。

- ・日本語をもっと学習したいという、モチベーションが高まった(全員)。
- ・作品を仕上げて上映されることで、表現することの達成感や自信につながった(全員)。
- ・次回に制作する作品のテーマがイメージできていると語るほど、日本語による創作意欲にあふれている(Sさん、Tさん)。
- ・余りにも壮絶な体験をしてきたために自分自身を振り返ることができなかったけど、DST作品の制作過程(対話活動)で同じような境遇の人との出会いがあり、今を見つめて将来の展望や希望、考えを持つことができるようになった(Sさん、Tさん)。
- ・1作目、2作目では個人の体験を振り返っての作品だったが、3作目の今回は、日本社会で日本語学習者が豊かに生きていくために必要な関係づくりの構築に視点を当てた社会性のある作品へと変化してきた(Rさん)。
- ・DST作品作りを通して、家庭の中でそれまでより日本語で話す機会が増えた。友達ができる。日本語学習サポート教室にもきちんと行くようになり、意欲的になった。自分のDST作品を日本語学習サポート教室に持って行き、仲間に見せていた(R児)。
- ・当初は自分の思いを主張することでいっぱいであったが、次第に他の人の話に耳を傾けることができるようになった。主婦の話題には全く興味を示さなかったが、次第に「世間話がしたい」と話すほど変化した(Sさん)。

サポーターやDST上映会の観客(地域住民、行政関係者・教育関係者等との関係では、
・制作過程で日本語パートナーが理解しながら日本語で補充してくれたり、上映会で観客が共感しながら日本語で反応してくれたりすることで、日本語や日本文化に対する理解が深まった。前回よりも大幅に観客が増え、「自分たちの思いを理解してくれる人が増えた」という思いを持った(全員)。
・DST活動は、制作者とスタッフ、日本語パートナーとが対等な関係で安心して自己を語れる場になっている。日本語学習者の思いを受け止める雰囲気があり、安心して情報の共有ができる(全員)。
・公開上映会を通して、幸区多文化共生推進事業のバスツアーにDST制作者も参加して交流するという連携も生まれた。
等が成果として考えられる。

これらの成果は、DSTの内包している機能に負うところが大きい。一般のテキストによる日本語学習と異なり、DSTでは制作者自身の生い立ちや日本に来てからの体験等そのものを教材にして日本語学習が行われる。それまでもはやした自身の思いや内面の悩みを語ることで聞いてもらえることで(共感—傾聴)、それらを整理できたり自分自身について思いがけない発見をしたり、また日本社会での自身の役割に気付いたりして、存在感を確かなものにしていけると言える。DST制作のどの過程においても、スタッフ・日本語パートナーと制作者(日本語学習者)との対話を通じた関係性が深まり、日本語を学ぶことの安心感・信頼性から学ぶ意欲の向上という成果を生んだのであろう。
また、上映会では学習者のDST作品でその声を受け止め、経験を共有し、その後に日本人が自己表現する事である。作品への共感をきっかけとして自己を振り返り、学習者との共通性や関係性を見つけ、自らの経験と想いを語り合うことで、双方向のコミュニケーションが生まれる。この時に学習者と日本人の交流が生まれ、信頼を生み出すコミュニケーション基盤がつけられる。DST上映会は日本人の多文化コミュニケーションの学習機会を提供し、対話の動機を生み出すことができる。

(9) 今後の改善点について

・今後の地域日本語教室において実施しうる双方が学び手となる活動の一例になったと思われる。また日本語教育専門家と地域の日本語教室の参加者と協働で作ったどのような人も参加できるサポート体制が整った活動でもあった。このような地域日本語教室に関わったことのない新たな参加者も活動しやすい活動形態をどのように広めていくのか今後考えていく必要がある。
・サポーターが、学習者との対話や質問のスキルがまだ十分でない。このためにはサポーターのコミュニケーションスキル(傾聴、質問、フィードバック)の育成が必要である。また学習者が問いかけられ慣れしている構造を乗り越えるステップの工夫が必要である。
・PC編集の支援力は個人差が大きく、一部の支援者への負担が大きくなっている。PC編集スキルの向上が望まれる。また、簡易なアプリを利用するなど制作者、サポーターの負担を軽減したい。
・今回のDST上映会は90名弱の参加者(観客)で、2会場での上映会(4作品、5作品)だったが、上映されるDST作品を全部見たいという声が多い。問題解決型や探求型等、バリエーションを変えての上映方法の実践も考慮に入れた。
・DST作品を制作し公開上映会を持つことは、日本語学習者・日本の地域住民双方にいい意味での変化をもたらした。本事業は、日本語学習者・日本の地域住民のより良い関係性、地域共同体を築いていくための触媒となりうると考えるが、さらなる広がりを模索していきたい。
・公開上映会参加者(観客)は増加したが、DST制作者を募集するのに毎回苦労している。どのように日本語学習を必要としている人たちに声掛けしていくか工夫のしどころである。
・多文化共生は一回のイベントで実現するものではなく、対話の継続によって一歩ずつ進められる。異なる文化を持つ人々との対話の意思、隣人への関心を高めることが重要となる。このためには上映の機会を増やすことが有効なアプローチとなると考える。本活動は2年を終えて、30作品を超える作品ライブラリーができている。ライブラリーを教材とする社会学習が可能である。小さな規模の上映会を地域や学校などで開催する体制づくりが、多文化共生の自律的な活動を進めるうえでの課題となる。

取組2:「やさしい日本語」学習支援事業

(1) 体制整備に向けた取組の目標

・保健福祉センターや学校等のお知らせ文書から情報を読み取る力をつける。「やさしい日本語」にする過程を通して日本の子育て等に関する制度や文化についても学ぶ。

(2) 取組内容

・『やさしい日本語』が通常のお知らせ文書とどのような点で異なるのかについてガイダンスをする。保健師や養護教諭などゲストティーチャーから話を聞き、外国人市民等が保健福祉センターや学校等の仕組みや仕事などを具体的に学ぶ。そのうえでそれらの機関から保護者向けにだされている文書を日本人サポーターとともに協働で『やさしい日本語』にする。学習の成果としてやさしい日本語版の文書を編集する。発行している部署に提供して、外国人市民を初め一般市民にも広くいきわたるようにする。

(3) 対象者

・川崎市南部に居住する外国人市民および日本人市民及びその子どもたち

(4) 参加者の総数 64 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 17 人

【出身・国籍別内訳】

中国	5人	インドネシア	人	
韓国	4人	タイ	人	・ミャンマー1人
ブラジル	1人	ペルー	3人	・フランス1人
ベトナム	人	フィリピン	1人	・中国帰国者1人
ネパール	人	日本	47人	

(5) 開催時間数(回数) 23 時間 (全 9 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年7月28日 (火) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	13人	やさしい日本語のガイダンス	1. 自己紹介 2. やさしい日本語とは(チラシの内容がわからなかったことなど経験を話す ほか) 3. (A)「NHK NEWS WEB EAZY」をペアで読んで、全体でわからなかったことを発表する。 4. わかりやすい文章のためのチェック項目の説明 5. 元の文章を読んで(A)と比較する。 6. (B)「帰宅困難者対策 川崎市総務局危機管理室HPから」のお知らせをペアで書き換える。模造紙に書く。 7. やさしい日本語を発表する。 8. 日本語をやさしく書くポイントの説明する。 9. 「やさしい日本語」に関する情報サイトの紹介をする。	古屋恵子	加藤真帆子 池田真貴
2	平成26年7月31日 (金) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	12人	「急な病気、けが」その時	1. 救急車の呼び方を学ぶ(どんなとき救急車を呼ぶかを確認する・症状の伝え方をわかりやすい日本語に書き換える・119番の電話応対を学び、ペアワークで練習する) 2. 救急で医者へ行った時の会話を練習する。 3. 例文A、Bについて、どちらかをやさしい日本語に書き換える。	古屋恵子	池田恵子 池田真貴

3	平成27 年8月4日 (火) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	12人	学校(保健)のおたより	1. 川崎市立小学校養護教諭の話聞く(学校での仕事/外国の子どもや家庭とのやりとりで困ること)・質問する。 2. 結核について知る。 3. グループ活動 川崎市HPの結核についての文章を読みわからないことを質問する。設問にやさしい日本語で答える。やさしい日本語に書き換える。模造紙に書いて発表する。	古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子
4	平成27 年8月6日 (木) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	15人	保健福祉センター児童家庭課からのお知らせ	1. 幸区役所児童家庭課家庭サポート担当・保健師の話聞く(妊娠―出産―出産後の手続き、母子健康手帳、出産後にすること、新生児訪問、こんにちは赤ちゃん訪問について)質問する。 2. グループ活動 保険福祉センターからのお知らせを分担し、やさしい日本語に書き替える。模造紙に書いて発表する。	古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子
5	平成27 年8月11日 (火) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	14人	川崎市識字・日本語学習活動の指針	1. 元幸区市民館長の話を聞く(川崎市の多文化共生へのあゆみ・川崎市多文化共生社会推進指針、川崎市識字・日本語学習活動の指針の作成について) 2. グループ活動 川崎市識字・日本語学習活動指針をやさしい日本語に書き換える。模造紙に書いて発表する。	樋口万喜子	加藤真帆子 池田真貴
6	平成27 年8月18日 (火) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	18人	道路交通法の改正(自転車)	1. 幸警察署の職員の話聞く(自転車を安全に乗るための話・自転車に乗る規則) 2. グループ活動 「自転車運転者講習」受講義務対象となる危険行為14のうち12について、やさしい日本語に書き換える。模造紙に書いて発表する。	樋口万喜子	加藤真帆子 池田真貴
7	平成27 年8月20日 (木) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	9人	子どもの権利条例	1. 川崎市市民・こども局人権・男女共同参画室職員の話聞く(川崎市子供の権利条約についてDVDを見る)。 2. グループ活動(かわさきしの「子どもの権利条約」をやさしい日本語に書き換える。模造紙に書いて発表する。	樋口万喜子	加藤真帆子 池田真貴
8	平成27 年8月27日 (木) 9:30～12:00	2.5	幸市民館	17人	まとめ	1. コーディネーターより昨年の取り組みの成果について説明する。 2. 多言語表示の検討(A. 3-4ヶ月検診・B. 1歳6ヶ月検診、3歳児検診) 3. 本年度5回の書き換えについて見直し(分担) 4. 本活動の感想・意見	樋口万喜子	加藤真帆 池田真貴
9	平成27 年10月20日(火) 14:00～17:00	3	川崎市役所第4庁舎	41人	・市バス一日乗車券 ・119番で消防署・救急車を呼ぶとき ・川崎人権オンブズパーソンへ	1. 「やさしい日本語」概要について説明する。 2. グループごとに課題について書き換える。模造紙に書いて発表する。 3. 「やさしい日本語」に関する情報提供をする。	樋口万喜子 古屋恵子	池田真貴 頼田敦子

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【第4回 平成27年8月4日】

1. W先生(川崎市立T小学校養護教諭)の話を聞く。

- ・学校での仕事
- ・外国の子どもや家庭とのやりとりで困ること
- ・結核について
- ・学習者からの質問:給食でアレルギーや宗教的に食べられないものについて
→きちんと保護者の方とお話をして対応、別メニューなど

2. 結核について知る。

3. グループ活動

- ・川崎市HPの結核についての文章を読みわからないことを質問する。
- ・設問にやさしい日本語で答える。
- ・やさしい日本語に書き換える。

4. 模造紙に書いて発表する。

5. アンケート



活動例②

【第6回 平成27年8月18日】

1. 幸警察署 F氏、A氏の話を聞く

- ・自転車を安全に乗るための話
- ・自転車に乗る規則がきびしくなったこと(道路交通法の改正)

2. グループ活動

「自転車運転者講習」受講義務対象となる危険行為14のうち12について、サポーターと対話しながら、やさしい日本語に書き換える。模造紙に書く。

3. 模造紙に書いたものを発表する。

4. アンケート記入



(8) 目標の達成状況・成果

アンケートの検証結果より『やさしい日本語』とは、日本人にとっても外国人市民にとってもわかりやすい日本語であることを認識できた。外国人市民が、行政や学校、地域のお知らせ文書の言葉に注目し、サポーターとともに、より多くの住民がわかるような日本語にする作業を通じて、日本の制度の知識や文化、新たな情報を得たり、それを人に伝えようという気になったりした。行政や学校、地域の日本人など発信する側も、理解可能な文書とは漢字に振り仮名を振ったり、ひらがなにすることではなく、日本語の構造などに注目する必要があることを認識できた。行政担当者と外国人住民との共同作業でやさしい日本語への変換に取り組んだことは、双方にとって大変意義ある機会であった。『やさしい日本語』とともに、それをバイリンガル外国人の手を借りて母語に翻訳した文書は保健福祉センターで実際に活用されている。単に『やさしい日本語』に言い換える作業だけでなく、活動を通して日本人市民と外国人市民の相互理解が深まり、さらに参加した日本語学習者やバイリンガル外国人のコミュニケーション能力としての日本語力が向上した。

(9) 今後の改善点について

行政が外国人市民に対して、積極的にやさしい日本語を取り入れたり、多言語で情報発信しよう意識し始めたことは大きな成果であるが、外国人市民が本当に知りたいことはどのようなことなのかなどは、共有されてない。本取組では、行政関係機関等の職員がゲストティーチャーとなり、地域住民としての日本人と外国人市民との協働による活動が中心だったため、参加した地域住民間では課題が共有できたが、行政関係機関等の全体的な課題としては共通認識されていない。外国人市民の対応窓口や保育園・学校等、外国人市民と接する機会の多い部署の職員間で、外国人市民とともに考える『やさしい日本語』活動を広げていくことが必要だろう。

また、インターネットを使った情報発信が多いが、外国人住民が、知りたい公的な情報を、どうしたら正確に得られるか、一方、インターネットを使えない外国人住民にどのように知らせられるか、地域日本人住民の立場からできることを考えたい。

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

外国につながる子どもたちや外国人市民が「自分の体験や気持ちを日本語で書いて表現する」力を獲得したり、生活するのに必要な情報を「やさしい日本語」にしたりするプロセスを通じ、外国人市民とともに日本人市民もお互いに学びあう。またこれらの対話活動の学習を通じ、市民同士の信頼関係を築き、同じ地域に住む市民や行政関係者が理解を深めて、多文化共生のまちづくりに寄与する。本事業を通じ、バイリンガル外国人市民サポーターが日本語学習者をサポートできるよう日本語のレベルアップを図る。

(2) 目的・目標の達成状況

・日本語学習者のアンケート、インタビューという検証方法により、自分のことを表現したり、情報を読み取ったりやさしい日本語にするプロセスで、日本語能力が向上したという意識、意欲の向上がみられた。
やさしい日本語の取組のゲストティーチャーとして、保健福祉センター（保健師）や学校（養護教諭）、警察署（交通課の署員）、市役所（市民・子ども局人権・男女参画室の職員）と連携でき、やさしい日本語に書き替えた文書をフィードバックでき、業務に反映したり、今後の参考に活かしたりしたいとの見解が得られた。
『幸日本語学級』や『にほんごワールド』のボランティアも参加し、対話を通して普段の活動ではなかなか気づきにくい日本語学習者の生活状況や現状を知り、国での様子なども知ることができ、お互いに理解を深めることができた。また聞いたことを相手のレベルの日本語に言語化する苦労も体験した。対話活動を通してお互いの信頼関係も築くことができ、取組1に参加した日本語学習者が、取組2にも継続して参加した。さらに昨年の日本語学習者の中から、今年はサポーターとして取組に参加した『バイリンガル外国人』もあらわれた。

(3) 地域における事業の効果、成果

川崎市における市民館での日本語・識字学級活動は、週1回の限られた時間であるため、会話が中心で、自分の生活に必要な情報を読みとったり、自分のことをふりかえり自分の体験や思いを書いたりする活動に時間をさくことができないのが実情だ。『生活者の外国人』として、日本に長く暮らしていても、単語レベルや助詞抜きでの会話だったり、それ以上の日本語がなかなか習得できない、あるいは、そこまで追求しようという動機がない学習者も多い。そういった学習者に、ボランティアはどう教える、あるいはサポートすればよいのか試行錯誤している。

そこで、取組1の『もっともって伝えようわたしの気持ち』では「話して書くという活動」では、初級と中級とグループを分け、各グループで、日本語教育専門家がモニターしながらペアワークを進めた。サポーターは、サポートの方向性がこれでいいのかといった不安を随時相談しながら進められたため、ペアワークもグループ活動も、そして活動全体も非常に参加者の満足度の高いものとなった。このケースをモデルにして、取組2や、取組1のDST作成活動も進められたため、今後の日本語教育体制整備のモデルの一つとなると思われる。

学習者自身も、自分のことをふりかえり、作品を制作するプロセス、およびDST作品の上映し地域住民や行政関係者、日本語教育関係者に見てもらい対話することでエンパワーメントされ、もっと日本語を勉強したい、初級者に日本語を教えたいなど社会参加の夢を語る日本語学習者も出てきた。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果

・取組1で制作された本年度のDST作品を、地域住民や行政関係者、日本語教育関係者等にむけて上映後、対話会を実施した。その結果、日本語学習者と地域住民や行政・教育関係者等の観客との間、日本語学習者同士、また観客同士の相互に共感が生じ、深くお互いを理解しうることができた。また、昨年制作したDST作品は、市内の多文化保育研究会など外国人に関わりのある団体の研修や川崎市内の公立中学校の人権の授業の教材として上映され、地域や学校での『生活者としての外国人』の理解を深めるきっかけを作ることができた。幸区多文化共生推進事業実行委員会の開催する事業への参加をよびかけ、交流をさらに深めることができた。

取組2では、行政職員の『やさしい日本語研修』として川崎市と協働で実施し、地域住民として参加していた日本語・識字学級のボランティアや日本語学習者とともに、『やさしい日本語』に言い換えるために必要な情報や不必要な情報、付け加える情報などを一緒に考えることができた。日本語学習者は地域の情報と伝わる日本語表現を学び、参加した職員や地域住民は外国人がどのような表現がわかりづらいのかや「やさしい日本語」に言い換えるポイントを学べた。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

・広報は、チラシを外国人関係の活動をしているグループに配布したり、タウン誌や幸市民館だよりに掲載した。成果の発信は行政関係機関に報告書と『やさしい日本語』の例を送付する。取組2のゲストティーチャーである保健師(保健福祉センター)や養護教諭(学校)、交通課の署員(警察署)、市民・子ども局人権・男女参画室の職員(市役所)と連携でき、やさしい日本語に書き替えた文書をフィードバックしたところ、業務に反映したり、今後の参考に活かしたりしたいとの見解も得られた。

(6) 改善点、今後の課題について

①現状: 定期的に関われている日本語・識字学級活動は週1回であり、日本語教育専門家のサポーターの人数も限りがある。日本語がなかなか習得できない、あるいはある程度上達したら、学習目的や目標があいまいなため、さらに追求し、学習し続けようという強い学習意欲を持ち続けることも難しい。そういった学習者に、いつ、どこで、どう教える、あるいはサポートすればよいのか試行錯誤している。

また、地域の市民も、生活者としての外国人にかかわっていない、あるいはかかわりはあるが、どうサポートすればよいかわからないような中、お互いの理解を深め、よりよい地域づくりを目指すための活動の質を向上し、機会を増やす必要がある。

②今後の課題

(1) 関係を築けたり、学習モチベーションが上がった日本語学習者との今後の居場所づくり(たまり場・しゃべり場など)どのように作るか。 (2) 対話型活動のプロセスでの母語の扱いや引き出し方(聞き方)をどうするか。

(3) 活動を通して日本語学習者の変化を生み出すようなサポーターとしての関わり方をどのようにするか。

(4) DST作品の上映会のバリエーションを増やし、地域住民がもっと参加し、満足できる活動にする。

(5) 子どもから高齢者まで包括的な活動にする。

③今後の課題解決に向けた活動予定

(1) DST制作後、対話型の作文活動の取組を引き続き実施する。

(2) バイリンガルサポーターの養成方法を模索する。

(3) アクティブリスニングのトレーニングなどをする。

(4) 地域の問題解決や課題探求などに向けた上映会を設計する。

(5) 『幸日本語学級』『にほんごワールド』『幸区多文化共生推進事業実行委員会』などとの連携をさらに強める。

(7) その他参考資料